「じゃあそろそろ始めてもらうか」
「は、はい……で、でも今日はダメな日なので
出すときは外でお願いします…」
「あー…まぁそれはそれで面倒だし自由にさせてやるよ」

リゼさんは意を決して涙を堪えながら
「ぼく」の陰茎に手を添えて、秘部に優しく導く
先程のゲームの結果、リゼさんと「ぼく」は強制的に
性交させられることになった。

ハッキリいって「ぼく」にもはやデメリットはないがリゼさんにとっては
当然違う。
「しっかり撮影してやるから張り切って頼むわw」
「タイトルは淫乱生徒会長の陰キャ童貞狩りってとこだな」
どうやら不良グループたちはこの性交を撮影して金を稼ぐ算段らしい。

「ぼく」の顔や情けない身体が公に晒されることになるが
リゼさんと繋がれるなら、もはや取るに足らない問題だった。
「ごめんね…初めてがこんな……私なんかで……」
涙ぐみながら小さな声で「ぼく」に語りかける。

「いや…ぼくは全然…」
嬉しい、と吐き出しそうになったが、流石に言葉を飲み込んだ。
出来るなら最後まで嫌われないようには立ち回りたい。

「んっ…」
「ぼく」のペニスが滑らかな指先で舐めるように触れられて
今にも暴発しそうになっている。
こんな状況でもギンギンになっている「ぼく」の陰茎に
少し軽蔑の念を含んだ表情になっている気がした。

「これ売り物にするんだからちゃんとさっき教えた台本通りやれよ？」
「ド早漏とか予定狂うから勘弁なw」
不良グループの1人が見透かしていたかのように僕たちに告げる。

「じゃあいくね…んぅっ…」
ちゅぽっ♡
ビクッ
ビク

「どう？オチンチンのさきっちょ私のおまんこで飲み込んじゃった…
気持ちいい？」
「き、気持ちいいです…」
腰が砕けそうになるほどの快感に必死に耐えつつ答える。
「良かった…じゃあ動くね……」

「んっ……ふっ……あっ……あんっ……」
ちゅこっ♡
ちゅこっ♡
ちゅこっ♡
ちゅこっ♡
ちゅこっ♡
ちゅこっ♡
ビクッ
ビクッ
「ぼく」の上で亀頭部分だけを刺激するように上下運動をしながら
艶っぽい声を出す。
自分も腰を動かして深くまで挿入したい衝動に駆られるが
そんなことをすれば余計に軽蔑されてしまいそうな気がしたので我慢した。

リゼさんの膣内は温かくヌルヌルしていて、
それでいてキツくて締まりがよく、とても気持ちよかった。
リゼさんは淫乱な生徒会長をなんとか演じようとしているが、
目元は悔しさか恥ずかしさからか更に涙がこぼれているのが見える。
でも「ぼく」にはそんなことはどうでも良くなっていた。
目の前にある快楽を貪りたいという欲求だけで
頭の中がいっぱいになりつつある。
ぬぽっ♡
ぬぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ぬぽっ♡
ぬぽっ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「リゼも「ぼく」のチンポ挿入れられて気持ちいいよな」
「は、はい気持ちいいです…」
「助けようとしてたやつのチンポだもんな、気持ちいいに決まってるよなw」
きもちいいです…
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
「はい……すごく……きもちいいです」
「ぶはははははっ！」不良グループが大声でゲラゲラ笑う。
「やっぱ女ってのはこうやって、
虐められてオモチャにされるのが好きなんだよな」
その言葉にリゼさんは悔し涙と声を抑えようとしながら
この罰ゲームを終わらせるために立ち振る舞う。

「じゃあそろそろイッていいよ…出すときは外で、ね？」

지잉!!
빙글!!
지잉!!

지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
지잉
빙글
빙글

ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズプッ
ズッ
ズプッ
ビクン
グプッ
ビクッ
ズポッ
ズポッ
ビクッ
グプッ
ビクン

リゼさんが腰の動きを速めていく
パチュッ　パチュッパチュッパチュッ
どこで覚えたのか精のすべてを搾り取るような腰使いで
激しくピストンされついに限界を迎えると同時に
身体が本能に支配された。
パチュッ♡
パチュッ♡
パチュッ♡
パチュッ♡
ぱこっ♡
ぱこっ♡
ぱこっ♡
ぱこっ♡

「あぁぁっ！イクッ！イっちゃいます！！
リゼさんのおまんこに思いっきり精液出したいです！！！」
彼女の膣穴に精液を注ぎ込もうと逃がさないように腰を手で抑え込む。
「え！？ちょっと待って！ナカはホントにダメ！」
リゼさんは焦ったような表情を見せるがもう遅かった
「ぼく」は彼女の制止を無視して絶頂を迎えてようとしている。
カシッ
グググ
グググ
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡
ちゅぽっ♡

いやあぁぁっ
ビュルルルルッ
ビュルルルルッ
ビュルルルルッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

あぁぁ…
ドロォ…
ゴポポポポ…♡
ビクン
ビュッ
ビュッ
ビクン

リゼさんの中で果てた瞬間、頭の中に真っ白な光が広がった
今まで経験したことない感覚に脳みそが溶けてしまうんじゃないかと思った。
一方リゼさんは絶望した表情で秘部に目をやる、
たしかにそこには「ぼく」の白濁液が流れていた。

「おいおい中に出したのかよw」
不良グループの1人は大笑いしながらスマホで撮影している
「ご、ごめんなさい……」慌てて謝るが時すでに遅しにも程があった。

「これで終わりだから早く抜いて……」
リゼさんは「ぼく」に失望したような表情で言う
「ぼく」は言われた通りにリゼさんの腰から手を放してペニスを引き抜いた。

ぬぽっと音を立ててぼくの陰茎は引き抜かれる。
陰茎を抜き取った後、彼女はゆっくりと立ち上がり
スカートについたぼくの精液を拭き取って、
そのまま教室を出て行ってしまった。

「ぼく」はどうすることも出来ずにただ立ち尽くしていたが、
不良グループがこちらへ近づいてきた。
「いやー面白いもん撮れたわ、リゼに生でヤらせて貰えて良かったなｗ」
「ナカはやめろっていってるのに無理やり射精すとかｗ
お前もなかなかやるなｗ」不良グループはニヤつきながら話しかけてくる

「ぼ、ぼくは……」
「まぁとりあえず今日はこれくらいにしておいてやるか、
明日また同じ時間にここに来い」
「は、はい……わかりました……」
「じゃあ今日のところは解散だ、お疲れさんｗ」
そう言って彼らは去って行った。
残されたぼくは呆然としたまましばらくその場に立ち尽くすしかなかった。